

日本旧石器学会 ニュースレター 第25号 NEWS LETTER No. 25

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



人類の進化と病

- Aging と Longevity という視点から -

新潟県立看護大学准教授 藤田 尚

最近のことであるが、海外の科学雑誌へ投稿していた論文のリバイスを求められた。レビューの指示に従って文献検索をしたところ、興味ある雑誌に遭遇したので、会員諸氏に紹介する。

Topić B, Raščić-Konjhodžić H, Cizek Sajko M.による、「Periodontal disease and dental caries from Krapina Neanderthal to contemporary man - skeletal studies.」Acta Med Acad. 2012;41(2):119-30. doi: 10.5644/ama2006-124.45.である。著者らは、130,000年前のネアンデルタール人である、クラピナ人の歯周病と齲蝕を、紀元1世紀、10世紀、20世紀の人骨と比較している。その結果を簡潔に紹介すると、1. すべての時代で頬側面（唇側面）の歯槽骨の退縮が、歯間部（歯と歯の間）の退縮より上回っており、クラピナでは6.12mmと比較したすべての時代で、最高であった。2. 進化の過程で、頬側面（唇側面）の歯槽骨の退縮は、減少する半面、歯間部の退縮が進行した。3. 齲蝕率（虫歯率）は、クラピナで0%、1世紀人で1.74%、10世紀人で3.44%、20世紀の人骨は11.87%と時代が下るにしたがって、齲蝕が増加している、ということであった。クラピナ人は歯周病を患っていたが、齲蝕にはなっていなかったのである。

私がニューズレターで会員諸氏にご紹介したかったのは、この論文の研究デザインとして、加齢変化を考察していることである。クラピナは14-23歳までの個体だが、あとのグループは、壮年前期（20-29歳）と50歳以上（当時として老年期）に分けて結果を示している。これは、私も以前から取り入れている研究方法であるが、なぜ、加齢変化を考えることが必要なのか、以下に説明する。

ヒトは700万年前に直立二足歩行を始めた。しか

し、そのこと自体が、ガンの多発化に大きく影響したとは、私は考えない。むしろ、人類は文化・文明を発達させ、長寿（Longevity）を手に入れたからこそ、ガンに冒されるようになったのである。つまり、平均寿命の大きな延びによる長寿社会の形成こそが、ガンを多発させる最も大きな要因なのである。その証拠に、日本全国で1千体は下らないと思われる、発掘された縄文人からガンの症例は、たった1例しか見つかっていない。縄文人ですら、平均寿命は極めて短く、その主たる死因は、感染症・寄生虫症であり、ガン年齢に達する以前に死亡していたのがその理由である。

脳卒中もまた然りである。人類が、極端に脳を巨大化させた生物であることには、全く異議がない。その結果、脳の血管が細くなり、大量の血液の循環を余儀なくされたのは、事実であろう。しかし、それを以って、人類は進化した故に脳卒中という病を抱え込んだ、とする意見には、同意できない。まず血液循環の主役である心臓付近の大動脈弓や胸部・腹部の大動脈と脳の血管を単純に比較することに、私は何ら意義を見出せない。前者は直径が2-3cmもある巨大な血管であるのに対して、後者が相対的に細いのは事実である。しかし、ここでも見落とされているのは、AgingやLongevityすなわち加齢や長寿という概念である。血管をゴムチューブに例えれば、その理屈は簡明である。新しいチューブは弾力性があり、少々のことではひび割れたりしない。一方長年使用してきたチューブでは、劣化が進み、いずれはどこかに裂け目が入ることになる。細胞膜で構成される血管も、この理屈と同様である。例えば20歳の若者の最高血圧（収縮期血圧）が200mm HGあったとしても、その若者の血管は破れないことだろう。しかし70年以上生きてきた高齢者では、血管の劣化が進み、何らかの血管性の疾患を引き起こすと予想される。要するに、人類は長寿を手にしたが故に、脳卒中に罹ることになったわけで、一方的にマイナスに捉えるのは、間違った思考である。

現代日本の3大死亡原因は、ガン、脳血管疾患、心疾患であるが、これらはいずれもある一定以上の高

齢者に起こりやすい、つまり長寿社会に特有の疾患であることを忘れてはならない。21世紀の現在でも、平均寿命が40歳そこそこの発展途上国の死亡原因の第1位は、感染症・寄生虫症であり、ガンや脳卒中は数%でしかない。日本の新生児死亡率は0.4%つまり1000人に4人であるが、アフリカのある国では、1000人中177人が1歳未満に死亡し、5歳になるまでに3分の1の命が失われる。このような短命な社会では、ガンも脳卒中も少ない。しかし、どちらの社会がより幸福かは、議論の余地がないところであろう。

人類進化700万年の中で、我々が長寿を手にしたのは、ここ数十年の出来事である。栄養状態の改善、医療の進歩、公衆衛生理論の普及などがその主たる要因である。会員諸氏は、考古学や人類進化学を専門とされる方が多いと思うが、今後はこうした病から人類の進化を考える、ということも極めて重要なことだと思われる。但し、その際は長寿を達成した先進国と、未だに旧石器時代とほぼ同様の疾病構造を維持せざるを得ない発展途上国との峻別を怠ってはならない。そこから旧石器研究の大きなヒントを得ることも可能だからだ。

シンポジウム「日本列島における 細石刃石器群の起源」の開催報告

2013年は、長野県矢出川遺跡において細石刃石器群が国内で初めて確認された1953年から、ちょうど60年目となる。その節目となるシンポジウム「日本列島における細石刃石器群の起源」が、長野県御代田町浅間縄文ミュージアムにおいて、9月14日・15日の両日開催された。主催は八ヶ岳旧石器研究グループおよび浅間縄文ミュージアム、共催は日本旧石器学会および明治大学黒曜石研究センターである。

第1日目から2日目は、以下の研究発表がなされた。

- 1 ミトコンドリアDNAからみた日本列島へのヒトの移住 安達 登 (山梨大学)
- 2 稜柱系細石刃石器群の生成プロセスの展望—荒川台型細石刃石器群を中心に— 佐藤宏之 (東京大学)
- 3 華北地域における角錐状細石核石器群—古本州島の細石刃石器群との関連について— 加藤真二 (奈良文化財研究所)
- 4 日本列島における細石刃石器群出現期に関する諸問題 加藤学 (新潟県埋蔵文化財調査事業団)

- 5 九州における初期細石刃石器群の形成過程 芝康次郎 (奈良文化財研究所)
- 6 古本州島開発型細石刃技術の起源 須藤隆司 (明治大学黒曜石研究センター)
- 7 北海道における押圧細石刃剥離技術の出現 高倉純 (北海道大学埋蔵文化財調査室)
誌上発表は以下のとおりである。
- 8 細石刃石器群と文化伝達、人口 仲田大人 (青山学院大学)
- 9 中部・関東地域における細石刃石器群の形成過程 夏木大吾 (東京大学大学院)
- 10 長崎県福井洞窟の発掘調査における細石刃石器群の層位的検出 柳田裕三 (佐世保市教育委員会)
- 11 石器群の小形化・細石器化と細石刃石器群成立へのイノベーション 堤 隆 (八ヶ岳旧石器研究グループ)
- 12 動作連鎖の概念に基づく技術学における石器製作実験—意義と必要性とその方法について— 大場正善 (山形県埋蔵文化財センター)

第2日目の9月15日午後は、前記の口頭発表者および誌上発表者の仲田大人氏・大場正善氏を交えて、堤隆を司会にパネルディスカッションがなされた。

日本列島における細石刃石器群の生成、とくに稜柱形に関しては、従来の石器製作技術からの内在的発生を追う見方が多くあるが、近年伝播という観点から加藤真二は、中国華北の「角錐状細石核石器群」の細石刃技術が、華北地域と九州との間にLGMの海面低下の陸化により出現した「三海平原」を経由するネットワークを通じて古本州島へ技術伝播がなされたという論を展開する。一方、佐藤宏之は、北海道の前期前葉細石刃石器群の技術情報が東北地方に伝播、青森県五川目(6)などの頁岩を擁する荒川台型細石刃石器群を生成し、さらに中部・関東地方では黒曜石に主要石材を転換させて、稜柱系細石刃石器群が形成されたと述べ、加藤とは正反対の議論を展開した。



パネルディスカッションの様子

また、ミトコンドリア DNA という考古学的観点とは異なる起源論が新しい話題となり、細石刃石器群の研究史的検討、九州や本州におけるその出現の問題、北海道における押圧剥離技術の採用の問題や、押圧剥離の同定に関する方法論上の議論もあった。

起源論とは、新資料の発見や分析手法の開発により、汲めども尽きぬ論題であるが、現時点でのいくつかの視座がこのシンポジウムで浮き彫りになった。

(広報委員会 堤 隆)

岩宿フォーラム 2013 / シンポジウム
「槍先形尖頭器文化の大規模遺跡と
遺跡の広がり」 開催報告

2013年11月2・3日にみどり市笠懸公民館交流ホールにおいて、第20回岩宿文化賞授賞式および岩宿フォーラム2013シンポジウムが開催された。岩宿文化賞は加藤真二氏(奈良文化財研究所)が受賞した。

岩宿フォーラム2013は「槍先形尖頭器文化の大規模遺跡と遺跡の広がり」をテーマとし、発掘60周年を迎えた武井遺跡について現在進められている発掘調査の成果をもとに議論を行う試みであった。

武井遺跡は1953年・54年に明治大学考古学研究室によって最初の調査が行われて以来、現在までに計13回の調査が実施されている。その間、武井遺跡は旧石器時代初期編年研究の示標遺跡から、遺物総数20万点に及ぶ槍先形尖頭器文化の巨大遺跡へとその評価を大きく変えた。

2010年度から開始した武井遺跡の調査は、安蒜政雄氏(明治大学教授)を団長とし、明治大学考古学研究室・桐生市教育委員会・みどり市教育委員会・岩宿フォーラム実行委員会の4者により武井遺跡群調査団を組織した。発掘調査は、武井遺跡の広がりを把握するため、従来調査されていた寄居山周辺の北側に調査区を設定し、2013年の第5次調査までで計27ヶ所の地点を調査した。詳細は、『概報武井遺跡群』を参

照されたい。結果として、武井遺跡の遺跡範囲と、寄居山周辺からなる大規模・高密度遺物分布域とその北側に広がる小規模・低密度遺物分布域により遺跡が構成されることを明らかにすることができた。

シンポジウムは以上の調査成果をもとに構成された。第I部基調講演では「槍先形尖頭器文化と武井遺跡群」と題し、安蒜政雄氏が講演した。1953年当時の武井遺跡の調査を取り巻く研究状況を整理され、槍先形尖頭器文化研究とともに遺跡・遺跡群、そうした遺跡群のまとまりをどのように研究していくかについて展望が述べられた。

第II部基調報告では「武井遺跡群の調査と研究」と題し、立石美紗樹氏から2010年度から開始した発掘調査の概要が、大塚宜明氏からは武井遺跡の調査成果とその意義がそれぞれ報告された。武井遺跡周辺の水文環境の変化を背景として遺物分布の拡大が想定されるなど、一定の成果が得られた。

第III部基調報告では「槍先形尖頭器文化の大規模遺跡と遺跡の広がり」と題して、武井遺跡周辺の槍先形尖頭器文化の遺跡と周辺地域の大規模遺跡・遺跡群が報告された。まず、「武井遺跡における槍先形尖頭器石器群」では関口博之氏が、これまで3回にわたって岩宿フォーラムで取り上げた武井遺跡の成果について報告した。「武井遺跡周辺の槍先形尖頭器文化の遺跡」では、軽部達也・小原俊行氏が未報告資料を含む周辺遺跡の組成と立地を報告した。「赤城山南麓の地質・地形と武井遺跡」では、小菅将夫氏が、赤城山の地形発達史を整理した。武井遺跡は大間々扇状地と赤城山南麓末端が接する丘陵上に立地しており、周辺地形と遺跡形成が密接に関連していることが示された。「月見野上野遺跡」では、小池聡氏が目黒川沿いに展開する槍先形尖頭器の流域遺跡群を、「東内野遺跡の形成について」では、下総台地随一の大規模遺跡について国武貞克氏がそれぞれ報告をおこなった。最後に武井遺跡形成の背景について2本の報告があった。「赤城山南麓に集う石槍狩猟民」では、須藤隆司氏が、槍先形尖頭器の形態分類と黒曜石産地推定分析の成果をもとに、武井遺跡の形成の背景に様々な地域集団が関与していることを論じた。「槍先形尖頭器文化の大規模遺跡と黒曜石原産地」では、飯田茂雄氏が黒曜石原産地における遺跡群の形成を時間的に整理し、黒曜石原産地の利用の変化が武井遺跡の大規模化と連動していることを論じた。

このほか、誌上発表として建石徹氏から、群馬県桐生市広間地西遺跡、千葉県富里市東内野遺跡の黒曜石



討論会の様子



現在の武井遺跡

原産地推定分析について報告があった。

パネルディスカッションでは、飯田茂雄、小菅将夫氏の司会で、槍先形尖頭器文化における遺跡の広がりや遺物の分布、大規模化する背景について意見が交わされた。槍先形尖頭器文化の遺跡とそれ以前の時期で遺跡立地に違いがみられることや、あわせて遺跡分布・規模が拡大することなど、議論を通して整理された。また、会場からは長谷川善和氏や早田勉氏が意見を述べた。

今回のシンポジウムでは、遺跡の発掘調査の中で、考古学的に記載された情報を中心に報告、議論を行った。我々が遺跡で認識しうる情報の共通点や違いが、遺跡の理解にどのようにつながるのかを考え続けることができたことが最大の成果であったと感じている。得られた課題は遺跡に持ち帰り、調査の中であらためて検討していきたい。

さて、武井遺跡は現在、「武井遺跡公園」として遺跡の一部が公有地化され保存整備されている。遺跡の範囲も明らかとなったいま、今後は史跡整備も含め、積極的な活用が望まれる。

(明治大学文学部助手：飯田茂雄)

参考文献

武井遺跡群調査団編 2010-2012 『概報武井遺跡群』 I - III

国際第四紀学連合第 19 回大会のご案内

国際第四紀学連合第 19 回大会が 2015 年に名古屋で開催されます。未確定の部分もありますが、日本旧石器学会会員のみなさまの積極的な参加をいただきたく、現段階の概要を記し、ご案内をいたします。詳細は日本第四紀学会のホームページに 19 回大会のコーナーを設けてありますのでご覧ください。quaternary.jp/index.html

■国際第四紀学連合とは

International Union for Quaternary Research (INQUA) は 1928 年に 14 カ国の創立発起国によってコペンハーゲンで設立され、現在は 4 年に一回の大会を開催し総会を開いています。第四紀学の世界的な発展を援助し、第四紀学における国際協力の促進、人類に関わる問題の解決に向け第四紀学の応用で役立つことなどを大きな目的としています。現在 46 カ国・地域が参加し、出版物は学術雑誌 Quaternary International、ニューズレター Quaternary Perspectives を刊行しています。

■名古屋大会

1 会議名：国際第四紀学連合第 19 回大会
International Union for Quaternary Research, XIX Congress (略称 INQUA Congress 2015)

2 主催：国際第四紀学連合、日本第四紀学会、日本学

術会議

3 共催：33 学会・協会・研究会（日本旧石器学会も共催団体です）

4 開催時期：2015 年 7 月 27 日～8 月 2 日（7 日間）

5 開催場所：名古屋国際会議場 / 名古屋大学

6 参加予定者数：50 カ国・地域から約 1,200 人

7 名古屋大会（2015 年）における特筆すべき事項：国際第四紀学連合の大会は地球環境の変遷を学際的に包括する研究分野として最も歴史のある国際会議です。2015 年の日本の開催は、アジア地域では 1991 年の中国（北京）での開催に次いで 2 回目の開催であり、日本では初めての開催となります。大会では、「社会のための第四紀学」を目指して、気候変化や自然災害による防災の軽減や持続的な社会発展や環境保全を考慮した第四紀学を念頭に、理学、工学、人文社会学の関係者がともに議論できる場としたい。また、リテラシーの向上と社会への還元を目的に、大会前日の 7 月 26 日に名古屋大学で自然災害等に関する普及講演会を予定しています。

8 メインテーマ：「第四紀学からみた気候変動・自然災害・文明」

主要題目：1) 自然災害軽減のための第四紀研究、2) 気候・海水準・環境変動予測高度化のための過去の変動の理解と定量化、3) 人類と自然の動的相互作用の解明、4) 第四紀層序学・年代学のための新しい技術と成果の統合

9 会議使用言語：英語

■考古学・人類学関係

1 人類と自然の動的相互作用の解明：このテーマには、1) 人類の進化と自然環境への文化適応、2) 現生人類の起源と行動の多様性、3) 後氷期の環境変化と文化の多様性、4) 先史時代における海洋交通、5) 完新世後期の環境変化と文明などが含まれ、複雑に変動する自然環境変化に人類がどのように応答したのかがその内容となります。特にこの 10 年間は日本列島を含む東アジアならびに北アジアに現生人類（ホモ・サピエンス）が、何時、どのように拡散し出現したのかが大きな話題を提供してきました。またこの地域でネアンデルタール人と現生人類がどのように交替したのか、あるいはごくわずかながら交配があったのかが広い関心を集めています。

膨大な石器資料とそれを使った人類がどのような関係にあったのか、道具と人骨の関係の分析も盛んにおこなわれ、化石人骨の DNA 分析の関係も新しい話題を提供しています。いずれのテーマも、国際誌の

Nature や Science の誌上で多様な論争が展開されており、2015 年に名古屋で開催される国際第四紀学連合第 19 回大会でも主要なセッションとして世界各国からの研究者の話 題提供と大きな貢献が期待されます。

特に、戦後膨大に研究蓄積を持つ日本の旧石器研究の成果を世界に情報発信する絶好のチャンスでもあります。

2 スケジュール等： INQUA の組織は以下のようなシステムを採用しています。おそらく 2013 年 12 月初旬に、正式に、INQUA 本部から各委員会（Commission）にセッション公募の案内が周知される。それを踏まえ各委員会は、委員会のホームページでセッションを公募する。公募期間中にその委員会を通してセッションを申請する。セッションは比較的大きなテーマの枠を申請する。個別の報告（口頭・ポスター）の申請はさらに後日、適合するセッションに申し込む。各委員会（Commission）をとおしてセッション、個別報告の登録が行われる点が重要です。

全体で 80～100 位のセッションが立ち上がる予定です。

考古学関係の委員会（Commission）は「人類・生物圏委員会」Commission for Humans and the Biosphere（略称 HaB Com）です。ここが窓口になります。佐藤宏之・小野昭の 2 名がこの委員会の正式メンバーになっています。委員会の詳細は日本第四紀学会のホームページから INQUA のホームページの Commission の欄へ飛んで確認ください。

（予定）

・各委員会経由でセッション公募開始 / 締め切り：2013 年 12 月 10 日～2014 年 2 月 10 日

・セッション案確定：2014 年 4 月中旬

・最終セッション確定：2014 年 5 月

・参加登録、発表、巡検申し込み開始：2014 年 7 月
<以下略>

■ 2013 年 12 月以降、INQUA のホームページと日本第四紀学会のホームページを時々チェックください。順次情報の開示があるはずですが、60 年に 1 度あるかないかの機会です。日本旧石器学会の会員の皆様の積極的な参加で日本の研究蓄積を広くアピールしていただきたいと思います。特に若い研究者相互の国際的・学際的な交流の場として生かしていただきたいと希望します。

（大会組織委員会学術プログラム委員：小野 昭）

2013 年度委員会中間報告

総務委員会 総務委員会は委員 3 名（役員 2 名、委員 1 名）で構成し、通常業務として会務に関する連絡調整、会員に関する事務を行っている。

2013 年度前半期は、旧石器研究第 9 号及びニュースレター第 24 号の発送を行った。また、研究グループ 2 件の採択、日本旧石器学会賞・学会賞の推薦、及び会員メーリングリストの設置についての事務を行った。

会計委員会 6 月の総会・シンポジウム開催に伴う会計行為に加え、収入では会費収入・印刷物頒布代金収入があり、支出では印刷製本費支払（会誌・予稿集・ニュースレター）、研究グループ運営経費・学会シンボルマーク賞金の支出を行っている。

今年度の会費納入者数は、10 月末日時点で 176 名（会員数 238 名）であり、未納者は 62 名である。また昨年度以前の会費未納者は 29 名である。未納者の数は昨年この時期と比べてわずかながら減少している。

学会賞の推薦について（再募集）

学会では、日本旧石器学会賞を定めました。ニュースレター第 24 号にて学会賞受賞候補の推薦を募りましたが、改めて再募集します。旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員を推薦してください。

1. 推薦内容 学会賞受賞候補
2. 推薦期間 2014 年 1 月 15 日（水）～2014 年 2 月 28 日（金）（必着）
3. 推薦者の資格 日本旧石器学会員
4. 推薦方法
 - ・学会賞受賞候補の氏名、学会賞受賞候補の推薦理由、推薦者の氏名・連絡先をご記入の上、郵送もしくは電子メールにより下記の事務局あてに送付して下さい。
5. 注意事項
 - ・推薦は自薦・他薦を問いませんが、お一人につき一名を限度とします。
 - ・学会賞受賞候補は、日本旧石器学会会員に限ります。推薦にあたって、学会賞受賞候補ご本人の承諾を得る必要はありません。
 - ・推薦の書式は自由です。
 - ・推薦理由は概ね 100 字から 300 字にまとめてくだ

さい。

6. 応募先・照会先

日本旧石器学会事務局（担当：伊藤健・山岡拓也）

〒422-8529

静岡県静岡市駿河区大谷 836

静岡大学人文社会科学部社会学科山岡拓也研究室

電子メール jpra_2003@ay.em-net.ne.jp

役員選挙について

2013 年 12 月 27 日

会員各位

日本旧石器学会選挙管理委員会
委員長 栗原伸好

日本旧石器学会の役員選挙告示

日本旧石器学会会則 6・7 条および役員・会計監査委員・顧問選出規定により、下記のとおり、役員選挙を実施いたします。

記

1. 立候補者・候補者推薦の受付

立候補者および候補者推薦は、別記作成方法により、2014 年 2 月 1 日（土）までに日本旧石器学会選挙管理委員会（〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836 静岡大学人文社会科学部社会学科山岡拓也研究室 日本旧石器学会事務局）に届け出てください。その折に公報に掲載する原稿は 100 字以内です。

2. 選挙公報・投票用紙

2014 年 2 月中旬に発送します。

3. 投票期間

2014 年 3 月 1 日（土）～3 月 20 日（木）

4. 役員決定

投票の結果、得票数の上位 22 位までを役員とします。ただし北海道、東北、関東、中部、近畿、中四国、九州・沖縄 7 地区の上位得票者から役員 1 名を選出し、他 15 名を上位得票者数によって役員とします。辞退者がいる場合は順次繰り上げとなります。

5. 被選挙権のない会員

現役員 22 名は全員改選の対象になります。以下の会員を除く全会員に被選挙権があります。被選挙権がない会員は、阿子島香、沖 憲明、小野 昭、加藤真二、諏訪間順、谷 和隆、堤 隆、麻柄一志、吉川耕太郎です。

2013年12月27日

立候補者・推薦者各位

日本旧石器学会選挙管理委員会
委員長 栗原伸好

日本旧石器学会の役員選挙にかかわる公報の原稿作成
について(依頼)

役員選挙立候補・推薦にかかわる公報の原稿につ
いては、下記により作成方お願い致します。

記

1. 原稿作成方法

A4版横書きのペン書き、またはワープロ原稿(A4、
10.5ポイント、横書き、ワード他)。なお、ペン書き
の原稿はワープロ原稿に直して掲載します。

1. 推薦候補

①候補者名、②推薦内容、③推薦者氏名

2. 立候補

①立候補者名、②自薦内容

②の内容は100字以内をお願いします。

2. 送付方法

下記に郵送してください。推薦候補の場合は、本人
の承諾を示すサインまたは押印、推薦者のサインまた
は押印が必要です。また、立候補の場合は電子メール
に添付して送付しても構いません。

3. 原稿締切

2014年2月1日(土)

送付先

〒422-8529

静岡市駿河区大谷836 静岡大学人文社会科学部社
会学科山岡拓也研究室 日本旧石器学会事務局

電子メールアドレス jpra_2003@ay.em-net.ne.jp

日本旧石器学会役員選挙日程(案)

2013年

12月 選挙告示

2014年

2月1日(土) 立候補・候補者推薦の締め切り

2月中旬 選挙公報及び投票用紙送付

3月1日(土)～3月20日(木) 選挙期間(3月
20日消印まで有効)

3月 選挙管理委員会による開票

5月 ニュースレターにて選挙結果報告

6月 総会にて選挙管理委員長報告

「第27回東北日本の旧石器文化を語る会 北海道大会」開催のお知らせ

- 1 日時 2014年2月1日(土)・2日(日)
- 2 会場 北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟
W201(札幌市北区北10条西7丁目)
- 3 主催 東北日本の旧石器文化を語る会
- 4 共催 北海道旧石器文化研究会
- 5 日程

【1日目】2月1日(土) 13:30～17:00

話題提供「東北日本における旧石器時代遺跡の調査Ⅰ」
北海道吉井沢遺跡(東京大学)、北海道勝山2遺跡(札
幌学院大学)、青森県尻労安部洞窟(安部遺跡)(尻労
安部洞窟発掘調査団・慶応大学、山形県白山E遺跡(東
北大学)、懇親会

【2日目】2月2日(日) 9:00～11:30

話題提供「東北日本における旧石器時代遺跡の調査Ⅱ」
福島県笹山原No.16遺跡(郡山女子大学)、新潟県榑
ノ木平遺跡(郡山女子大学・石器技術学研究会)、秋
田県下堤G遺跡(再整理報告)(秋田市教育委員会)、
資料検討会

6 参加申し込み・会費等

・参加希望者は1月6日までに下記あてにお申込みく
ださい。懇親会への参加・不参加を必ず添えてくださ
い。連絡はなるべくe-mailをお願いします。

・参加費は1,000円、発表要旨集代1,000円(予定)
を当日受付で申し受けます。

・懇親会費は4,000円程度の予定です。参加される方
は当日受付でお預かりします。

申し込み先：第27回北海道大会事務局 高倉 純
〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目
北海道大学埋蔵文化財調査室

TeL. 011-706-2671、e-mail jun-ta@let.hokudai.
ac.jp

「長野県旧石器文化研究交流会2014」 開催のお知らせ

- 1 日時 2014年2月15日(土) 13:30～17:30
- 2 場所 御代田町浅間縄文ミュージアム(エコール
みよた) あつもりホール 〒389-0207 長野県
北佐久郡御代田町馬瀬口1901-1
- 3 内容

(1) 講演 「先史人はどのように岩石資源を開拓し
たか - 石器石材の岩石学と研究法 - 」野尻湖ナウ
マンゾウ博物館 中村 由克

- (2)「南牧村矢出川第Ⅷ遺跡の調査」 長野県埋蔵文化財センター 前田 一也
- (3)「中ッ原5B地点および1G地点における削片系細石刃石器群の黒曜石利用」 明治大学黒曜石研究センター 堤 隆
- (4)「長和町広原遺跡群の調査」 明治大学黒曜石研究センター 橋詰 潤
- (5)「長和町男女倉遺跡群の調査」 長和町黒曜石体験ミュージアム 大竹幸恵・村田弘之
- 4 主催 長野県旧石器文化研究交流会、0.00%研究会、八ヶ岳旧石器研究グループ、浅間縄文ミュージアム
- 5 申込 不要（当日若干の資料代をいただきます）
- 6 問い合わせ先
e-mail : tanio100@yahoo.co.jp（長野県旧石器文化研究交流会事務局）
tel : 0267-32-8922（浅間縄文ミュージアム）

お知らせ

日本旧石器学会研究グループの募集

本学会では、旧石器考古学及びこれに関連する研究課題について国内・国外の情報を交換し研究することを目的として、研究グループを設置しています。その「内規」には自由に研究を行うことができる上、運営費を補助することも盛り込まれています。

つきまして、2014年度の日本旧石器学会研究グループを募集します。研究グループの発足を希望する会員は、グループ名、代表者名、連絡先、研究目的、活動予定期間、参加者数、運営費交付希望の有無などを記入して本学会事務局に応募してください。募集期間は2014年3月31日（月）まで。応募・問合せ先は、事務局へ電子メールまたは郵送をお願いします。

来期は4年目にあたり、1年目に採択された「研究グループ」が満期を迎えますので、新規応募のチャンスです。

2014年度 研究発表・ポスターセッション 発表の募集について

2014年6月21・22日に小平市民文化会館（ルネこだいら）で開催される総会での研究発表・ポスターセッション発表を募集します。

詳しくは追って、日本旧石器学会 HP において掲載しますので、奮ってご応募ください。

メーリングリストの運用について

ニュースレター第24号にてお知らせしましたとおり、メーリングリストの運用を開始しました。これは、学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場として活用していくために設けたものです。

事務連絡はこれまで通りニュースレターやホームページで行いますので、強制するものではありませんが、まだ登録していない会員諸氏におかれてはメーリングリストの登録に御協力ください。メールアドレスを、総務委員の山岡のメールアドレス（takuyayamaoka@yahoo.co.jp）までお知らせください。またハガキにご記入いただき、事務局住所へ郵送していただいても構いません。速やかにメーリングリストをご利用できるようにします。

なお、メーリングリストへ登録するメールアドレスを、山岡のメールアドレス（takuyayamaoka@yahoo.co.jp）へお知らせいただいた際には、必ずメールアドレスを受け取った旨を返信しています。お知らせいただいたけれども返信がなかった場合、何らかの理由でお送りいただいたメールが届いていないと考えられます。ですので、返信がなかった場合にはお手数ですが、学会事務局のメールアドレスか住所にご連絡ください。

会費納入のお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されているため、会費は原則前納とさせていただきます。会費未納の方々につきましては、速やかに所定の会費の支払い手続きをなされますようお願い申し上げます。年会費は5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号 00180-8-408055 です。全国の郵便局にて簡単に手続きいただけます。

日本旧石器学会ニュースレター 第25号

2013年12月27日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会
谷 和隆・沖 憲明・高倉 純

発行：日本旧石器学会

事務局：〒422-8529 静岡市駿河区大谷
836 静岡大学人文社会科学部社会学科山岡
拓也研究室

E-mail jpra_2003@ay.em-net.ne.jp

HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>